【第59号】2010.7.1 発行

DRAMA かながわ 59

神奈川県演劇連盟事務局：横浜市中区福富町西通り52（横浜演劇研究所内）Tel. 045-261-4866

2010年　神奈川演劇連盟　総会

神奈川県演劇連盟理事長・劇団河童座　横　田　和　弘

2010年４月25日　新生(？)よこはま壱座の稽古場において、神奈川県演劇連盟総会が、開かれた。総会には49名の代議員が集結し　その後の交流会には65名が集った。

09年度の活動報告から始まり　10年度の活動方針まで主に連盟がかかわる７つの事業を　中心に今年は波乱もなくスムーズに進んだように思われる。

そんな中　今年の　総会のキーワードは　やはり連盟の50周年。

50周年の記念事業として行われる　12月に予定される合同公演と記念誌の発行。そして　来年度の事業にはなるが芸術劇場の柿落とし合同公演が　注目された。

企画が多すぎるのでは？との質問が出るなか、更なる事業が展開されることへの　期待と不安が入り混じった声が聞こえた。しかし　それを支えるかのように　若い劇団若い人の存在感が増したのが　今年の総会の一番特長だったのではないだろうか。

合同公演の演出の土井宏晃氏　新しい副理事長の緑慎一郎氏　多少若いという言葉には抵抗があるかもしれないが演博の責任者関口素実氏　会計の織田裕之氏などなど　担い手の若返りを感じた。特筆なのは　総会の後の　交流会での若手の多さであった。例年なら　大御所(？)が　最後まで幅を利かせていた場の中心が　とにかく若返った。最後まで残ったメンバーは　圧倒的に若い人が多かったのが印象的であった。

しかし片側では　やはり気になった点があった。それは事務局体制の実態である。議事のなかでも個人名が出たよ

うに山元さんの力に負うところの大きさである。まかせっきりで来た事務局体制に　反省の必要とこれからの問題点が提起された。これまでも多くの個人への負担で成り立ってきた　連盟の体質を改善しなくてはいけなくなってきたのも50周年を迎えた連盟への課題となった。まだまだ　出来る人たちだけへの依存度が大きいという事なのだろう。簡単ではないが　将来に向けて早急に解決しなくては……の意識が生まれたと感じたい。

若い　若い　というと反論が出そうである。勿論　やはりベテランたちの存在感は大きい。事務局体制にしろ　資料室　世界演劇祭　さまざまな要望書作りなどなど　ベテランの力に負う実態は大きく　その力なしでは成立しない。最近　理事会の平均年齢も若くなったが　今年の総会での若い人たちのパワーを見る限りもっと積極的な参加があって然るべきとも　感じた。

さて　もう一つ大きな話題になったのが　青少年センターの指定管理問題であった。これに関しては　憶測の報告にとどまり　連盟として出来ることとしては今のところ要望書でのアピール程度しかないが　近い将来必ず大きな問題となるはずなので　注視をしていかなければならない。

理事長の挨拶のなかにもあったように　50周年は　頼もしい　楽しい事業や　新しい芸術劇場のオープンなどがある反面　不安な面も多々ある　悲喜こもごもの年になりそうであるが　とにかく全てが　神奈川の演劇環境をよくするため　強いては個々の劇団の将来にかかわることなのでポジティブに乗り切ろうと　総会は幕を閉じた。（少し、うまくまとめすぎただろうか……）

さて　引き続き行われたのが　交流会。華はやはり　交流会にある。メンバーも増え　恒例の劇団紹介に始まり京浜協同劇団の城谷譲氏とゴローチャン《腹話術》との　愉快でチクリとした世相批判などで大いに　盛り上がった。

今年の交流会の特徴は　個々の輪がたくさん出来　会場のあちらこちらで　交流以上の盛り上がりを見せていたことだろうか……。先を見つめた　合同公演や企画などに対する　具体的な動きなどに話が及んでいたように見受けられた。

何かが生まれるのは　このような場なのかもしれないとしみじみ思った。多分　二次会　三次会へと流れたグループが　いくつもあったに違いない。このような場が　総会だけでなく　時々行われるべきなのかもしれない……。

さて　総会の反省点も幾つかあった。

一番残念だったのは　来賓の少なさか。交流会から参加で言葉を頂いたテアトルフォンテからの井上学氏一人（＋ゴローちゃん）だったということは残念だった。これは連盟の存在価値が小さいということではなく　あくまで事務的な遅れなどが原因だったと思うので　大きな反省として残しておきたい。

連盟参加の新しい劇団が増え　20劇団体制になった現在その若い力が反映されるのは当然のことではあるが　やはり頼もしい。そして　50年周年を迎え　続けることの、続けてきたことの凄さを誇る　ベテランの劇団　ベテランの人材の存在が　これまた　頼もしい。

連盟のよさは　老若男女　さまざまなジェネレーションの人が集うことである。そういう意味では　理想的な集団になりつつあるということであるのか……。

それを感じる　意気盛んな　実りある　総会であったとまとめたい。

県演連総会のあと　《懇談会（二次会）報告》

劇団「横綱チュチュ」　**鈴　木　み　な**

４月25日お天気にも恵まれたこの日の午後、「2010年度神奈川県演劇連盟総会」は活気のある中つつがなく進行し、無事に閉会となりました。

椅子が整然と並べられていた会場は、瞬く間に二次会場と姿を変えるのですが、出席者で行われた会場のセッティングの早いこと早いこと……あらかじめリハーサルや打ち合わせがあったわけでもないはず。さすが演劇人！「場」を作るのはお手の物なのだと、あらためて感心しました。

テーブルの上に次々と料理が並べられ、乾杯！！　しばし歓談タイムとなりましたが、総会での緊張感が解けたのかあちこちでにぎやかな話の花が咲きました。中には、初対面の人。一年に一度の逢瀬となる人。顔は知っていたけど初めて話す人。いたはずですが、アルコールの力をちょっと借りて、緊張がほぐれたこともあり、ざっくばらんですが有意義な懇談の場となっている様子。年に一度とは言わず、このような時間をもっと持つことが出来れば、演劇連盟の活動も、各劇団の情報も、互いに広く理解でき、風通しの良い関係ができるのではないかと、感じた方も多いと思います。

さて、歓談後は恒例の「劇団紹介」です。各劇団それぞれ昨年の報告と今年度の活動予定を紹介しました。最後は京浜協同劇団の城谷護さんによる、プロの腹話術の技を披露して頂きました。ゴローちゃんを片手に全国を飛び回って活躍中とのこと。城谷さんとゴローちゃんの絶妙な掛け合いに、会場内は笑いに包まれました。

最近、演劇連盟には若いパワーあふれる劇団が入会してくださり、各方面で原動力となって活躍中で、とても心強い限りです。今年度は50周年という節目の年、12月には50周年の記念合同公演があり、また来年５月には神奈川県芸術劇場での「柿落とし合同公演」が控えているなど、明るい話題が盛りだくさんですが、それぞれ並行して、準備をすることは容易なことではないため、若いパワーも、あんまり若くないかもしれないパワーも、各劇団が力を合わせて、記憶に残るいい年にしたいと感じました。

「神奈川県演劇連盟五〇年史」刊行についての報告とお願い

高津一郎

10年前私たちは神演連創立四〇周年の記念事業の一環として「神演連四〇年史」を発刊しました。A4版190頁の大冊です。

この四〇年史では〈神奈川県下の各エリアにおける戦後から現在までの多くの市民演劇人たちの働きによって受け継がれてきた演劇活動の歩みと稔りとを、今の視点で提起し再確認し収録し「神奈川県演劇連盟四〇年史」として編纂する。〉ことを意図し、特に〈神奈川県下の市民演劇活動に底通する《戦後市民演劇精神史》として次世代の活動者に伝える。〉ことを目指しました。

以上が、「神演連四〇年史」刊行の基本的なコンセプトであり、ほぼその意図を満した記念誌が出来上がったと考えておりますが、果たして次世代のメンバーに読み継がれているかどうかについては疑問が残ります。

さてそこで、今回の「神演連五〇年史」の刊行ですが、基本的には前の四〇年史のコンセプトを引き継いでその続篇を作製します。

ただし、四〇年目以後の五〇年までの一〇年間を問うこととともなれば、それなりに変動と称すべき事態もあったわけで、先ず次の二点を強調し探ります。

(一)神演連の劇団が(合同)したりして、その視点を現代社会に向けてする活動の対象となるのは観客と演劇を見ようとしない〈市民〉、文化活動を支える或いは距離を置こうとする〈行政〉、文化活動に対する視点の微妙な〈マスコミ〉などです。この三者の中にも支援の手を差しのべて下さる方々も居られるのですが、事演劇、そして舞台表現を間にはさんだ時、私達表現者と表現を観る外側の三者とは立場を異にする〈対立者〉となる筈です。そうでなければ〈批判〉など生まれようがありません。

しかし、両者がお互いの立位置を認め合いながら〈演劇表現〉を通じて〈批判なり共感なり〉を持ち合うことによってより〈深い交流〉に到達できるとすれば、お互い立場を異にしながら〈共生〉を実現出来る筈なのです。

今県演連が主動し或いは係っている様々な事業活動(要望書活動・演劇資料室運営・神奈川県演劇フェスティバル共催・演劇博覧会共催・青少年のための芝居塾・神演連合同公演主催・横浜世界演劇祭支援・DORAMAかながわ発行・ドラマかながわフォーラム・横浜演劇祭シンポジウム・神奈川県芸術劇場オープン行事参加・神演連五〇年史発刊)などなど、その総てが地域社会や対立者との〈共生〉を目指す事業活動だと云っても過言ではないでしょう。

●以上、発足以来内部の充実を目指してきた神演連の姿勢が(資料室・合同公演・演博・芝居塾)など〈青少年ホール〉の支援を受けて花開いていった〈神演連共生事業活動篇〉を〈飯田克衛〉さんから〈山本忠利〉さんへのリレーで「神演連共生事業活動五〇年史」としてまとめてもらいます。

(二)神演連は二、〇〇〇〜二、〇〇九の一〇年間に新規加盟として次の劇団一団体を受け入れることになりました。(劇団「横綱チュチュ」・劇団きさく座・劇団ひこばえ=地域演劇教育集団・風雲かぼちゃの馬車・劇団やぶさか・演劇プロデュース『螺旋階段』・ラゾーナ川崎プラザソル・横須賀市民劇場プロジェクト・よこはま壱座)。

このような新規加盟の一気増加は二、〇〇〇年以前には殆どなかったことで、このため神演連のエネルギーがすこぶる増大したことは事実ですが、これは青少年ホールが〈演博〉の会場として多目的プラザを提供してくれたことと担当理事の努力とが新規加盟の呼び水となったようで、これは本当にありがたいことです。

また、この他にも〈芝居塾・合同公演・資料室〉など青少年ホール側の手厚い支援を受けておりますので、現在問題化している〈指定管理者制度〉が適用されるような事になったら県演連の〈共生事業活動〉の未来はどうなってしまうのか……。私たちは今、大きな岐路に立たされることになるかも知れません。大切な問題なので〈新規加盟劇団・団体〉の皆さんにもこの心配を共有してもらいたいと思います。

とにかくこの「新規加盟劇団・団体篇」では各劇団・団体の代表者(安次嶺里絵子・高橋行恵・村上芳信・土井宏晃・海老原あい・緑慎一郎・別府寛隆・吉本敏克・勝崎若子)の皆さんに所属する劇団・団体の生い立ち・抱負・現在の活動などを書いて頂き、既成の劇団、更には新規加盟劇団間の相互理解を深め、〈共生〉の状況をつげていくことに役立てたいと願います。

各代表者はすでにお渡ししてある「新規加盟劇団・原稿データ入稿のお願い」を参考にして〈山本伸二委員〉の元に入稿して下さい。

以上が「神演連五〇年史」の重点項目です。

(三)続いては五〇年史が四〇年史の続きではある役割りも果たさなければなりません。具体的に云えば「各エリア(二、〇〇〇〜二、〇〇九)一〇年史篇」ということになります。

列挙すれば、

「川崎エリア市民演劇一〇年史」京浜協同劇団・川崎演劇塾→(藤井康雄)・H&B→(別府寛隆)

「横浜エリア市民演劇演劇一〇年史」劇団葡萄座・劇団麦の会・劇団かに座・横浜小劇場・G/9プロジェクト→(山元洋一)

「横須賀エリア市民演劇一〇年史」劇団河童座・劇団蒼い群れ→(高島明子)

「平塚エリア市民演劇一〇年史」劇団きさく座→(高橋行恵)

「小田原エリア市民演劇一〇年史」劇団こゆるぎ座→(関口秀夫)・その他劇団→(緑慎一郎)

以上の皆さんに各エリアのまとめをお願いしてありますのが、この他に湘南・県央など未加盟エリアの処理。横須賀・小田原エリア四〇年史。横浜エリア戦前・戦中篇の問題がありますが、紙面が足りませんので次回に譲ります。

横須賀市民劇場プロジェクト

芝居に恋すること

6月19日(土)劇団かに座創立60周年第100回記念公演、アガサ・クリスティ／原作　内村直也／翻案『そして誰もいなくなった』を観劇し、帰路終着の京急三崎口駅までの車中のなかで、感慨深い思いをつよく胸に刻み込んだ。劇評を書くつもりはないが、会場で記念公演に相応しい劇団主宰者である老練の田辺晴通氏にお会いすることが出来た喜びから発する。背を丸めた田辺氏の後ろ姿は、昔と変わるものではないが、どうしてどうして未だ矍鑠(かくしゃく)とした力強さを感じた。大先輩であり偉大な地域演劇人のおひとりである。

横濱演劇研究所所長･飯田克衛氏にも会えたし、前劇団麦の会代表･山元洋一氏の堂々たる存在感を見せつけた初舞台姿も拝見することが出来た喜びも加えて、嬉しい夜会となったのである。

横須賀市民劇場プロジェクト代表･吉本が最近特に驚いたことと言えば、去る5月28日横須賀市立青少年会館ホールで本来秋季公演に向けた二ヶ月間にわたる市民公募応募者によるワークショップの成果として、修業公演の発表が見事に開花したことである。

2008年5月、舞台巧紡「彩(あや)」代表・羽賀義博、劇団「夢樹」代表・今井　恵、プロジェクト夢樹代表・吉本敏克の三者合意により横須賀市民劇場構想を立ち揚げ、2008年

12月23日に発会式、2009年3月～4月、一般市民公募のワークショップを経て、招聘した芸術監督の羽賀義博氏は、平成21年度神奈川演劇フェスティバル参加作品として、10月9日～10日、別役実作『はるなつあきふゆ』を横須賀市民文化会館大ホールで旗揚げ公演として上演した。2ステージ650名の客席から湧く大賛辞と、圧倒的多数の高い評価がアンケートに示され、大成功を納め、満足したのは私だけではない。

10年4月～5月、第2回一般市民公募による応募者など総勢28名参加でワークショップを開催し，最終5月28日、横須賀市立青少年会館ホール、ミニ修了記念公演で、別役実作・コント劇集『愛』を上演した。これは、男1、女1のふたり芝居で、10チーム・20名出演による10ステージで、初心者総勢が想定外の成果をみせてくれた。

この成果を大きなバネとして芸術監督の羽賀義博は、またもや本年の神奈川県演劇フェスティバルと三浦半島演劇祭2010参加作品として、別役　実作『歌うシンデレラ』を上演作品として決定し、6月より本読み稽古をスタートさせ、オーデションによるキャスティング構想に熱く燃えている。横須賀･横浜の4ステージに複雑なダブルキャストも勿論考えてのことである。20代の男女から70代の男女に至るまで、各人各様に火花を散らすことになる。公演日は横須賀市立青少年会館10／23・24青少年センター11／13・14である。

吉本は1956年県立横須賀高校を経て、1957年「劇団ピッコロ座」に始まり「劇団創作舞台」「横須賀演劇センター」「劇団風留社」「劇団夢樹」「プロジェクト夢樹」で演出を歴任。また、1965年には、故･加藤　衛先生に師事し、横須賀演劇連盟初代理事長も務めた。数年前から地域演劇に未来はないと失望していた代表吉本は不死鳥のごとく生き返ったのであろうか？はたまた演劇への束の間の恋なのか？(笑)……。

[横須賀市民劇場プロジェクト：吉本]

芝居を観る

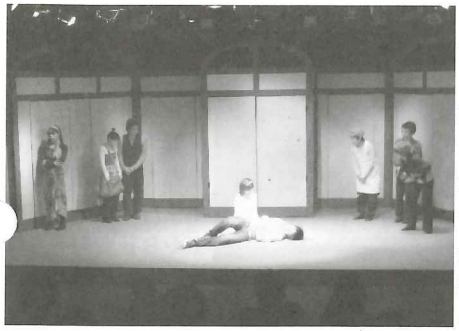
2010年4月～6月

劇団河童座＋風雲かぼちゃの馬車

「リリオム」 作／モルナール・フェレンツ

脚色・演出／横田和弘・土井宏晃

2010年４月17～18日　於：横須賀市立青少年会館
５月１～３日　於：横浜相鉄本多劇場



かっぱとかぼちゃが舞台で共演。書き出してみると意味不明だ。かっぱはきゅうり。かぼちゃの馬車は魔法使い。かぼちゃの馬車にかっぱが乗っている様を浮かべるのはメルヘンを通り越してちょっとした心霊体験だ。そんなコラボレーション作品「リリオム」を観劇した。映画化、舞台化を何度もされているらしいのだが、観たことはないので本当に予備知識のないまま「リリオム」を体験した……。そこで、演出家の二人に教えてほしい。この作品はいったい何を訴えようとしているのだろうか？笑いもした、感動もした、しかし、疑問符だらけが頭をよぎってしまう。作品はオリジナルではない。ということは何かある作品のはず。しかし、私はこの作品をほとんど理解できていない。ユリはなぜリリオムを愛するのだろうか。これは「リリオム」の一番の中心なのに私は観終わった今も考えてしまう。愛は盲目なのだろうか。いや、こう考えさせる作品なのだろうか。これを書いている今もぐるぐる回転木馬のように回っている。しかし、そう思わせる気持ちにさせた一番の理由がユリ役の山本悦子の好演である。リリオムとの出会いから娘との最後の会話までの気持ちの変化、成長を見事に演じてみた。そう、リリオムへの愛が伝われば伝わるほどわからなくなってしまったのだ。最後まであっという間に観劇できた舞台だからこそ作品を理解したくてしょうがないのである。

また、今回は河童座とかぼちゃの馬車の合同公演ということで特色の違う演出を役者陣がどうやって一緒に演技するのかに注目していたのだがもっともっと強調した方がよかったと思う。リリオム＋気取り屋のシーンが一番かぼちゃの馬車を強くあらわしているのは少し残念。演出の土井宏晃はこれからも横田和弘に挑んでいっていっぱい叩かれるべきだ、きっと「強く叩かれても少しも痛まない」と言うのだから。

［演劇プロデュース『螺旋階段』：緑慎一郎］

G/9-Project

「メゾン・ド・コワレ～爆裂小春日和の迷宮」

演出／仲尾玲二

2010年４月22日　於：シルクロード舞踊館

４月22日、G9/Projectさんによる、ラッシュ・アワー　シーズンⅢ『メゾン・ド・コワレ～爆裂小春日和の迷宮』を観劇してきました。

このラッシュアワー・シリーズは、G9さんによる本公演ではなく、毎月連続して新作を上演するという企画であり、構想から制作～そして発表までのリミットも一ヶ月という画期的なもの。料金は995円。千円を支払って「御縁があるように」５円をお返しするというスタイルは制作的な側面から見ても、なかなか面白い趣向ではないでしょうか？

客入れ中から、鎖エチュードのように役者陣が会話を続けており、待っている間も観客を飽きさせません。オープニングテーマを歌った後「始まるよー！」とキャスト全員が元気に呼びかける出だしは、昔のコント番組風の雰囲気も含めて、なかなか新鮮でした(笑)。和やかな雰囲気の中、“コワレ荘”に住む「雨でキャンプに行きそびれた」住人達とのやりとりが、ほのかな笑いと共に進行していきます。全体としては、数人づつによる短いシーンが繋がっていき、登場人物達の関係も少しづつ見えてくる、という構成。

演技そのものは、何処までがアドリブで何処までが脚本上のもの？と悩んでしまうほど軽快なアドリブの連発で、突発的なハプニングすら取り込んでしまう役者陣の柔軟性に、客席は終始、温かなムード。特筆すべきは、劇中で「観客が事前に書いた褒め言葉を書いた紙」を回収し、それをもとに～拾いながら～アドリブを繋げていくというセッションタイムがあったこと！私が書いたメモが真っ先に読み上げられ(しかもスベり)「すみません…」と思いつつも、自分が参加しているようで、なんとなく嬉しい気持ちに。客席参加形のお芝居というのは、こういう事を言うのかも!?公演の60分は勿論、その前後も含め最後まで「観客に楽しんでもらう事」を重点においた劇団の姿勢を感じ、心地良い時間を過ごさせて頂きました。

［劇団やぶさか：海老原あい］

横浜演劇研究所付属劇団　横浜小劇場

朗読劇「葬送歌・桃」（井上ひさし作「十二人の手紙」より）

作／井上ひさし　演出／飯田克衛

2010年５月22日　於：山手ゲーテ座

週末の観光客で賑わう港の見える丘公園。その向かいに粛々と建つ煉瓦造りの建物の中に、今回の公演会場『山手ゲーテ座』がある。

ゲーテ座と言えば、明治初頭に日本に初めて西洋演劇をもたらした劇場として、その名を耳にされた方もいらっしゃると

と思う。その初代ゲーテ座は、惜しくも関東大震災で崩壊してしまうのだが、古いハマっ子にとっては、伝え聞く逸話と共に何か特別な響きを感じる劇場名でもある。現在の『山手ゲーテ座』は、かつてゲーテ座があった場所にモニュメント的に置かれた客席数100ほどの小振りな劇場。そして同じくコンパクトな舞台の上には、4組の椅子と譜面台が整然と並べられている。

今回の演目は、日本を代表する小説家でもあり劇作家でもある井上ひさし先生の名作短編連作集「十二人の手紙」から2作品をとりあげての朗読劇。これから目の前で井上ひさし先生の世界が展開していくんだと思うと否が応でも期待に胸がふくらんでいく。

やがて客席の照明が落とされ、朗読劇が始まった。出演者は皆着席し、譜面台に本を置いた状態で各登場人物別に読み手を割り振った形で物語が読み上げられていく。朗読劇というからには、ただ本を読むだけではない何らかの趣向が加えられるのでは？と勝手に思い込んでいたが為に、当初は少々拍子抜けな印象を持ってしまったのだが、出演者の素敵な声と効果音の心地よさに、いつしかそんな雑念が消えて井上ひさしワールドへ引き込まれていった。

途中10分間の休憩を挟んでの2作品の上演が終わり、再び客席の照明が明るくなる。その時私自身が抱いていた情感は、正に自分自身で本を読み終えた時のものだった。作品の内容が、井上先生特有のひねりが効いた作品だった為とも思えるが、贅沢を言わせて頂ければ自分で本を読んだ時以上の何かが得られていれば、もっと特別な情感を胸に山手ゲーテ座を出ることが出来たのに…出演者の皆さんの並々ならぬ演技力が垣間見れただけに、そんな欲にかられるような公演だった。そして最後に、今年4月に他界された井上ひさし先生に対し、哀悼の意を表したい。

［劇団「横綱チュチュ」：伊藤俊之］

京浜協同劇団

「　鼬　」　作／真船　豊　演出／内田　勉

2010年5月28～29日
6月4～6日　於：スペース京浜

スペース京浜にしつらえた「鼬」の舞台は、黒びかりのする大黒柱、ど太い梁から下げられた自在鉤に鉄鍋、板の間に切られた囲炉裏、それをぐるりと取り囲んだゴザ。懐かしい古民家のたたずまいだ。「夕鶴」の「つう」や「与ひょう」が出て来そうな……。だが、そこで繰り広げられたのは「業」や「欲」に振り回され、見栄と意地を張りまくる人々のドラマだ。ベテランの俳優陣が、酒飲みで計算高い百姓や、強欲な馬医者、落ちぶれた「だるま屋」の女主人、伊勢金のおかみなどの人物をくっきりと見せて見事だった。世話役の喜平さんは何とも言えぬ愛嬌があって観ているこちらも思わず笑みがこぼれてしまう。山影先生の欲張り振りときたら、あきれてしまうのだけれど、どことなく可愛らしくて、演者の人柄が滲み出てしまっているのか、狙っているのか……。伊勢金のおかみのしっかりさ加減は圧倒的だったし、信念を貫き通すおかじは大迫力だった。おとりは妖婉でぬけ目のない女が表現されていたが、作った表情がたびたび強張るのが気になった。おしまは、悪たれを表現しようとするあまり肩に力が入ったのか、声が息になってしまいセリフが聞きとりにくかったのが惜しい。弱い女の哀れさは感じ取れた。萬三郎は、何か表現に曖昧な感じが残ってすっきりしなかった。五月出演の弥五は、少し抑えめの表現にした方が全体の流れになじむのではないか。古町のかか様も愛嬌があった。

「鼬」は、京浜協同劇団の持つ、渋い持ち味が十分に発揮された作品に仕上がっていたように思える。

［よこはま壱座：川西玉枝］

劇団ひこばえ

「天国まで」作／梨澤慧以子　演出／薩川朋子
「lucky boy（ミュージカル）」
戯曲／花井佑佳　補綴／貝塚吉風　潤色・演出／帯包麻菜

2010年6月5～6日　於：サンハート

まずは10周年おめでとうございます。前身は小中高生ミュージカルということなので、設立当時小学生だった子が高校生やら社会人やらになって参加されていたのでしょうか。そう考えると、とてもとても楽しいですね。では、2本立てだったので1本目の「lucky boy」から。こちらは子供達にもわかりやすい王道なストーリーを押さえながらも、歌ありダンスあり、笑わせながらも啓蒙することも忘れない、大人も子供も楽しめる、まさに10周年記念のお祭りにピッタリな内容でした。出演者が楽しそうだったので何よりです。

さて2本目の「天国まで」。こちらは本当に等身大の高校生を見ているようで、とても微笑ましかったです。どこにも無理なく自然体の学生達がいて、お話はファンタジーなのに不思議と現実感の失われない見ごたえのある作品でした。さらに終演後、たまたま後ろを歩いていた女子高生らしき2人が「恋がし たくなった!」と、かなり盛り上がっているのを聞いて、これは芝居として大成功だと改めて思いました。

一つだけ苦言を言うならば、開始時間が両方とも10分も押してしまったこと。特に後半はあれだけスタッフがいるならば、観客をきちんと誘導できたはずです。芝居自体も予定より長かったため、合計30分のずれは少し痛かった……。

［劇団河童座：浅葉久美子］

劇団麦の会

「温泉旅館湯けむりの里
そんなモンは犬も喰わねえ一の巻」
作／山口雄大　演出／山口雄大

2010年6月12～13日　於：関内ホール・小ホール

老舗温泉旅館が舞台のドタバタコメディで笑いあり、感動ありでした。二年に一度の公演で今年が第四弾ということで初めて観ましたが、マンネリ化している様子もなく、私の隣にいた方は両手で口を隠すほど大笑いしていました。

老舗温泉旅館湯けむりの里はアットホームな雰囲気で個性の豊かさが溢れる仲居さん達や若女将、女将が老夫婦と新婚夫婦の二組を迎え入れるところから始まり、夢野又三郎一座の危機を温泉

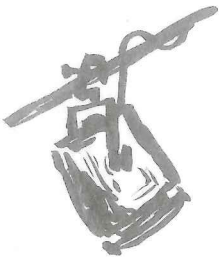
旅館の従業員で乗り越え、二組の夫婦は便坊紙一家によってお互いの気持ちや現状を確かめ合い、古典落語の芝浜からも夫婦の絆を見せられる一面もあり、最後は美空びばりさんの華やかなステージをきっかけに出演者総動員で幕を締めました。

長年連れ添った老夫婦は御子息の結婚をめぐり気まずい雰囲気が流れておりましたし、新婚夫婦は夫の秘密が原因で険悪な状況下に陥ります。それぞれの夫婦に現れる便坊紙一家は貧しさを象徴していましたが、双方の夫婦に大切な絆を気付かせる役割を果たしていて、どの家庭にも一度は現れる機会があっても良いのではないかという印象を受けました。また、故　五代目　三遊亭円楽師匠の象徴とも言える古典落語「芝浜」を公演されたことは演劇を通して一つの日本文化を知らせることが出来て素晴らしいことだと思います。一時期、テレビドラマの影響で落語のブームが到来したこともありましたが、今回のように芝居とコラボレーション出来たことは羨ましく思いました。

これは個人的な意見ですが、ひと際目立っていた女将さんと美空びばりさんの出演の仕方が少し淋しい印象を受けました。くどくなってしまう可能性があるかもしれませんが、双方ともにためるにためての出演でしたのでもう少し華やかで豪快に出演されても良かったのではないでしょうか。

今秋にまた新たな公演が控えているのでまた違う麦の会さんを観られることを心より待ち望んでいる方も多いはずです。

［G/9-Project：瀬戸内　紫紀］



劇団かに座《劇団かに座創立60周年第100回記念公演》
「そして誰もいなくなった」

原作／アガサ・クリスティ　翻案／内村直也　演出／田辺晴通

2010年６月18～20日　於：かなっくホール

今回初めてかに座の皆さんのお芝居を観させて頂きました。演目は有名なアガサ・クリスティの原作ですが、脚本は翻訳されて日本の昭和30年代を舞台としたものになっていました。私は事前にアガサ・クリスティの原作本を読んで観劇に臨んだのですが、当日頂いたパンフレットで初めてその事を知りました。しかし、舞台のセットや小道具などは原作のイメージにも良く合っていて、造りも細部まで良く作られていました。壁に取り付けられたブラケットの灯りも、それだけが灯った薄暗いシーンもあり、すごく雰囲気が出ていました。そういった装置がすべて手作りとのことで、とても感心しました。

私としては、開演時間よりかなり早めに行ったつもりでしたが、受付は多くの人でごった返していて、入場も整理されながら順番にといった感じでしたが、受付の皆さんの手際が良く、思ったよりもスムーズに席に着く事が出来ました。比較的前の方の席に着く事が出来、開演直前に後ろの方の席も見回してみると、多くの方が今か、今かとお芝居が始まるのをワクワクしながら待っているのが伝わってきました。

個人的に、特に判事役の馬場秀彦さんと、元将軍役の山元洋一さんの落ち着いた雰囲気が堂々としていて、演じられていた役のまま実際にいそうな印象を受け、自分もそういう演技が出来たらなぁと思いました。

サスペンスということで、終始良く目を凝らして観させて頂きましたが、いつの間にか飾られていた人形が消えていたり、窓越しに眠っていたように見えていた人が実は背中を刺され殺されていたり、見せ方にとても工夫をされているように感じました。ラストも原作とは変わっていて、原作を良く知る人もアッと驚いてしまうような、最後まで楽しめる作品でした。かに座の皆さん、お疲れ様でした。

［劇団川崎演劇塾：新井佐智子］

青少年のための芝居塾＋風雲かぼちゃの馬車

Romeo and Juliet

ロミオ＆ジュリエット

- west Graveyard Story -

この夏に贈る、最高のモンスターラブストーリー

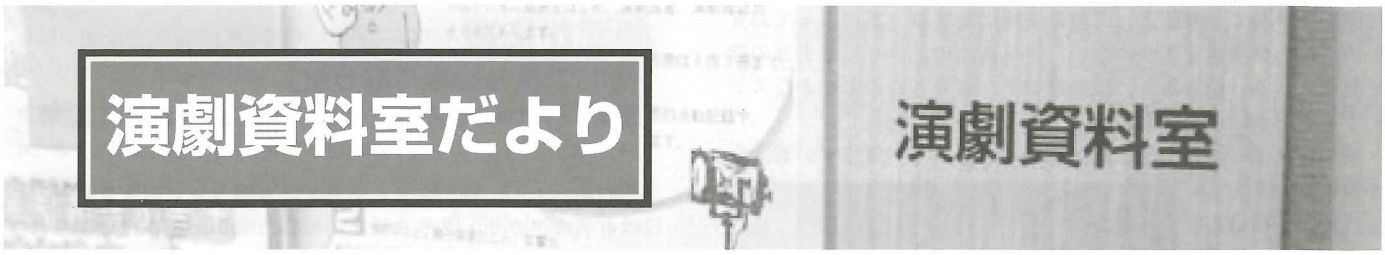
芝居塾

2010年８月19日（木）17:00開演
20日（金）13:00開演・17:00開演
21日（土）13:00開演・17:00開演
22日（日）13:00開演

※開場は開演の30分前、受付開始は60分前。

会場■神奈川県立青少年センター2F多目的プラザ
料金■一般（前売・当日共）2,000円、高校生以下（前売・当日共）1,000円

主催：神奈川県演劇連盟・風雲かぼちゃの馬車
共催：神奈川県立青少年センター



公演記録ビデオをDVD変換 → 公演資料の長期保管をめざす

現在公演記録ビデオはVHSで記録されているものが多い。

音声、映像の記録媒体は新しい媒体の開発に伴いめまぐるしく主流の媒体が変化している。古い媒体（陳腐化した媒体）は再生機器が生産されなくなり記録を再生することができない事態も起こり得る。

図書館や資料室のように、長期にわたり保存する施設にとって頭の痛い問題である。

記録媒体としてのVHSは広く利用されているが、最先端の媒体からすこしづつ陳腐化媒体に移行しつつあるといえるだろう。

正直のところこの先20年後にどの媒体が生き残っているのか全くわからない。

演劇資料室では音声・映像資料を継承するために現時点での一般的と思える媒体DVDに変換（ダビング）して保管することに決定、変換作業をはじめた。

DVD化することによってもうひとつ大きなメリットがある。VSHとDVDを比べると容積が1/10程度に圧縮できることである。保管場所に悩む演劇資料室にとってこれは福音とも言える。

とはいえDVD変換作業には根気と根性がひつようである。

ビデオ変換のための高速変換機器もあるようだが演劇資料室の変換機器：Sharp HDD/DVD/ビデオ一体型レコーダはリアルタイムの再生･変換のために上演時間が100時間かかれば変換・録画時間も100時間かかる。

この壮大な変換プロジェクトをすすめたのが山元さん、わたし荒井はヨコで毎日朝から夕方までながめていてよくつづくなあ……と山元さんの根気強さに感服。

変換作業は一ヶ月あまり小中学校演劇発表会の音声モニター漬けになりこの一ヶ月ですっかり小中学校の通になってしまった。（ただし、映像抜きの音声だけの）

■ DVD化した音声・映像資料

- 神奈川県小学校演劇発表会
  第23回（1988年）～第44回（2009年） DVD 36枚
- 神奈川県中学校演劇発表会
  第25回（1987年）～第33回（1995年） DVD 17枚
- 県立青少年センター保存資料　北条友希夫氏撮影
- 神奈川国際アマチュア演劇フェスティバル公式映像資料
  第１回（1985年）、第２回（1989年）、第３回（1993年）
  北条友希夫氏撮影、　北条友希夫氏寄贈

［演劇資料室：荒井賢一］

編集後記

発行にあたって、記事の提出の遅い県演連のみなさんにつき合って、ただ待っていただけの私でした、が、山本伸二さんのお力で７月中出来上がることができました。これは「き・せ・き」です。山本さん、ありがとうございます。

総会を終え、昨年の、数多い事業をこなしていった報告を聞いてどれだけの人の関わりがあったのか想像を超えてしまいます。そして、ドラマ神奈川が多くの事業現況・事後報告をしていきましたが、網羅できたのか、不安でもあります。

今年も県演連の事業は昨年と比べて、ますます多くなっています。どの事業にも時間をかけて取材ができる人材がほしいですね。

また、県演連の運営部分だけでなく、各劇団が抱えている問題など、一緒に話し合える場をこの紙面に作ることができればなおいいと思っています。　［編集長：安次嶺里絵子］

神奈川県演劇連盟加盟団体の記録（50音順）

●演劇プロデュース『螺旋階段』　●京浜協同劇団　●劇団蒼い群　●劇団河童座　●劇団かに座　●劇団川崎演劇塾　●劇団きさく座
●劇団こゆるぎ座　●劇団ひこばえ　●劇団葡萄座　●劇団麦の会　●劇団やぶさか　●劇団横綱チュチュ　●劇団よこはま壱座
●風雲かぼちゃの馬車　●横須賀市民劇場プロジェクト　●横浜小劇場　●ラゾーナ川崎プラザソル　●ラ・テラ　●G/9-Project

神奈川県演劇連盟HP：http://kenenren.web.infoseek.co.jp/2003/　演劇資料室HP：http://kenenren.web.infoseek.co.jp/shiryoushitsu/

DRAMA かながわ〔第59号〕　発行日：2010年７月１日　発行：神奈川県演劇連盟　編集：安次嶺里絵子（劇団横綱チュチュ）